



『賑わいをもとめて』

標 点

次へ繋ぐことつな

県古代吉備文化財センター所長

大橋 雅也



昭和20年8月6日午前8時15分、広島の地で18歳の父は爆心から約1・8キロメートルの場所まで気を失った。自分の目に焼き付いた悲惨な子どもたちに一切伝えることはなく、ただ背中全面を覆うケロイドの原因と生き残れた理由だけが、晩酌に酔った口を衝いて出た。泉下の客となるまで当時の詳しい話は、ついぞ聞けなかったが、4年前の遺品整理中に自治体誌に掲載された被爆体験手記を見た。そこには、閃光の瞬間と意識を取り戻した後に死地をさまよう姿、仮設収容先の小学校講堂での気休めの治療とただ死を待つ恐怖の記憶が、「こんなことは、もう地球上には決してあつてはならない」という言葉とともに、短く遺されていた。

平成24年4月1日、東日本大震災復興支援派遣職員として宮城の地を踏んだ。まだまだ瓦礫の処理が残る中、車のナビに映し出された海沿いの街並はそこにはなく、荒涼とした光景が目の前に広がり、写真を撮ることは躊躇ためらわれた。1年間、地元職員、そして全国からの派遣職員

とともに復興事業による工事に先立ち、遺跡を記録として残すための発掘調査に携わった。高台移転工事で姿を消す遺跡の発掘調査現地説明会には、その場所に転居予定の被災住民も多く参加していた。

「生まれ育った土地が長年にわたって紡いできた、人々の営みの歴史を自ら知り、次に伝えることは、この地で今を生きる私たちの責務なのです」

そう語る年配の彼女の強い目の光を、10年経った今も忘れられない。議論を呼びながらも、石巻市大川小学校、山元町中浜小学校をはじめ、震災遺構として数多くの場所が今に遺されている。

令和元年11月、『岡山県文化財保存活用大綱』が策定された。この大綱が、岡山の地に息づく文化財を次代へと繋つなぎ、地域社会再生の標となることを願ってやまない。記憶を途切らせることなく、伝え続けること、何をどのように次へ繋ぐのか、私たち大人の宿題は大きい。